

研究ノート

田中一松の眼と手

江村 知子

はじめに

一 田中一松の家庭環境

- (一) 田中家と父・一寧
- (二) 叔父・一貞
- (三) 兄・一郎

二 一松の絵

- (一) 「筆のまにまに」
 - (二) 自作の絵葉書
 - (三) スケッチブック
 - (四) 作品調査ノート
- おわりに

はじめに

田中一松たなかいちまつ（一八九五～一九八三）は、大正末から昭和の半世紀以上にわたり、公務として文化財の調査に携わり、絵巻・仏画・水墨画などを中心に数々の重要な業績を残したことで知られる。昭和二十八～四十年（一九五三～六五）に東京国立文化財研究所（当時）の所長を務めており、当研究所には所縁の深い人物である。昭和四十八年（一九七三）には永年の日本美術史研究の功績により、矢代幸雄に次いで日本人として二人目に、アメリカ・スミソニアン協会からフリアメダルが授与されている。その生涯に実見調査した絵画作品の数は夥しく、その造詣の深さと幅広くさにおいては余人の追隨を許さず、調査の際に書き留められたノートやスケッチは膨大で、これを整理すればそのまま昭和の古画備考になる、と生前から評判になっ

田中一松の眼と手



挿図1 田中一松

ていた。⁽¹⁾一松と親交のあった美術史研究者や関係者からは、一松先生は始終、絵の前で画板を持ってスケッチしていた、というような逸話が多く聞かれる。数人で作品を見ているような場合、他の研究者はとくに作品を見終わって談笑しているような時も、いつまでも作品の前にいたという。調査のたびに調査が書かれた。もはや鑑賞の域に至っているかのような詳細なスケッチを伴うもの、膨大な文字情報によるもの、あるいはごく基本的な情報のみのも、様々なものがあり、同一作品を複数回調査しているものもある。こうした連綿と繰り返された調査により、縷縷として調査が作成、蓄積されていった。田中一松の没後、研究や業務に関する蔵書、自筆ノート、資料、写真などは、昭和四十七年（一九七二）から亡くなるまで一松が理事を務めていた出光美術館に寄贈された。二万冊余の図書・雑誌については、出光美術館で整理が行われ、田中文庫として所蔵され目録が刊行されている。⁽²⁾蔵書以外の調査や写真などの資料群については、保存活用のため、平成二十年（二〇〇八）に出光美術館より東京文化財研究所が寄贈を受けた。以来、整理作業を進め、現在も継続中であるが、これまでに三度、田中一松資料を展覧会で公開している。⁽³⁾一松の調査を実際に見て、その調査対象の幅広さ、文字やスケッチで記録された作品情報の豊富さに驚かれた方も多いと聞く。この小稿では一松の家庭環境についてこれまでに確認できたことをまとめ、その後、文化財行政の中核に深く関わっていく経緯を紹介したい。

三九

一 田中一松の家庭環境

田中一松(挿図1)は、明治二十八年(二八九五)十二月二十三日、山形県鶴岡市天神町(現・神明町)に、庄内中学校(現・山形県立鶴岡南高等学校)の国語漢文教師であった田中一寧と茂子の夫妻の次男として生まれた。朝陽尋常小学校(現・朝陽第一小学校)、庄内中学校、第一高等学校第一部文科を経て、大正十二年(一九二三)に東京帝国大学文学部美術史学科を卒業し、その後、東京帝室博物館美術課嘱託となり、本格的に仕事を始めていく。まずは田中家と父・一寧、その弟で一松の叔父にあたる一貞、そして一松の兄・一郎について確認しておきたい。

(一) 田中家と父・一寧

一松の父、一寧は庄内藩士・田中一俊の長男として幕末・元治二年(一八六五)に鶴岡で生まれ、士族の子弟専用の苗秀学校(旧致道館)、西田川中学校(現・山形県立鶴岡南高等学校)を経て、明治十四年(二八八一)に山形師範学校入学、病気で同校を中途退学するが、西田川中学校教員の白井重高について漢学を学び、明治三十一年(二八九八)庄内中学校の教師となる⁽⁴⁾。田中家は代々、庄内藩士の家柄で、著名な人物には田中桐江(二六六八〜一七四二)がいる。桐江は江戸時代中期の一信の六男で若くして江戸に出て、儒学をもって柳沢吉保に仕え、將軍綱吉に経書を講するなど儒者として活躍し、同時代の荻生徂徠とも親交があったことが知られる。正徳三年(一七一三)、桐江は吉保の姦臣を斬ったことにより江戸を出奔、仙台に身を隠していたが、かねてより親交のあった撰津芥川(現・高槻市)光徳寺の僧・獨麟の招きにより池田に隠棲した。池田に移り住んだ桐江のもとには多くの好学の士、文人たちが参じ、「呉江社」を結成した。その同人は京都から尼崎の撰津一円から百人以上が集まり、池田学派を形成し、大きな影響を与えた。その後この地を拠点に活躍する呉春など数々の画家や俳人らの文人文化の揺籃ともなった⁽⁵⁾。一寧は幼少の頃より、周囲から偉大な先祖である桐江の話聞かされており、自らも漢詩を理解するようになり、ますます桐江を崇敬していたが、桐江が若くして故郷を離れ、しかも遁世しているという経歴ゆえ、その墓の所在がわからないことを遺

憾としていた。このことを弟の一貞に語り、大正三年(一九一四)に一貞が関西に赴いた際、桐江の墓が池田の大広寺にあることを発見した⁽⁶⁾。大正十年(一九二二)六月には「田中桐江先生 一百八十年祭 記念絵葉書」が発行されている。桐江の墓、桐江の肖像画、印譜の絵葉書がセットになっており、田中一松資料のなかに含まれている(挿図2)。後年、一松は山形県酒田市の本間美術館の理事を務め、同館に桐江の書蹟や資料を寄贈している。田中家に代々伝わったものではなく、一寧の時代以降に収集されたものであると推測される。一寧は大正十二年(一九二三)



挿図2 田中桐江絵葉書

に池田史談会が刊行した『田中桐江伝』に序文を寄せ、敬慕する先祖の墓参りと顕彰がなされたことに「豈感激狂喜して踊躍せざるを得んや」と喜びを表している⁽⁷⁾。

一寧は杏邨と号し、日頃から折にふれて漢詩を吟じ、昭和十一年(一九三六)に『杏邨詩稿』を発行している⁽⁸⁾。この自序によれば、一寧は庄内中学校に四十年余り勤め、大正十三年(一九二四)春、還暦を迎えて辞職し、長男の一郎の住む広島に移り住み、悠々自適に詩作に興じる生活を送っている旨が記されている。口絵には桐江の肖像画の写真、そして一寧が庄内出身の文人画家・石井子龍の筆塚を訪れた際の写真(挿図3)が掲載されている。その次頁には、石井



挿図3 田中一寧

子龍の短評とともに子龍が一寧の曾祖父にあたること、この鶴岡の子龍の筆塚で幼少の頃よく遊んでいたこと、この写真が昭和八年（一九三三）五月に広島から郷里に帰った時のものであることが記されている。⁽⁹⁾一松は二十歳で上京後、夏休みなどには郷里の鶴岡に帰省しているが、兄の一郎が広島に住み、両親も故郷を引き払って広島に移住した後は、一松も益暮は広島に帰省しており、広島が第二の故郷となっていたようである。⁽¹⁰⁾一寧は昭和二十年（一九四五）、広島に投下された原子爆弾の犠牲となり、八十一歳で亡くなった。⁽¹¹⁾

（二）叔父・一貞

一松の叔父、一貞は慶應義塾で福沢諭吉の薫陶を受け、慶應義塾第二回海外留学生となりアメリカ、ヨーロッパで社会学を学び、パリに滞在していた日本人留学生・芸術家・外交官らの親睦会パンテオンの会員でもあり、慶應義塾初代図書館長を務めた人物であるが、つい最近まで、一松の叔父であるとは認識されていなかった。⁽¹²⁾両者の間の親交については後述することとして、まずは一貞の経歴を確認しておきたい。一貞は明治五年（一八七二）に田中一俊の三男として生まれた。一寧と一貞の間に次男がいたことになるが早世したらしく、記録が残されていない。一貞は明治二十二年（一八八九）に上京、翌年に慶應義塾へ入塾、明治二十六年（一八九三）、慶應義塾大学部文学科へ入学した。なお一寧・一貞兄弟は、鶴岡で同じ庄内藩士の齋藤家から高山家に養子に行った高山樗牛（林次郎）と、その弟の齋藤良太と親交があったことが知られている。一貞は良太の一歳年上だったが、鶴岡朝陽小学校、庄内中学校の同級生で、一高に進学した良太と慶應義塾に進んだ一貞は東京でもともに過ごすことがあった。一高在籍中に良太は肺結核に罹り、勉強を続けることが困難になり、鶴岡で明治二十七年（一八九四）に他界している。この頃の回顧録が田中一貞「良太の一生」、田中一寧「良太を懐ふ」という題で語られている。⁽¹³⁾

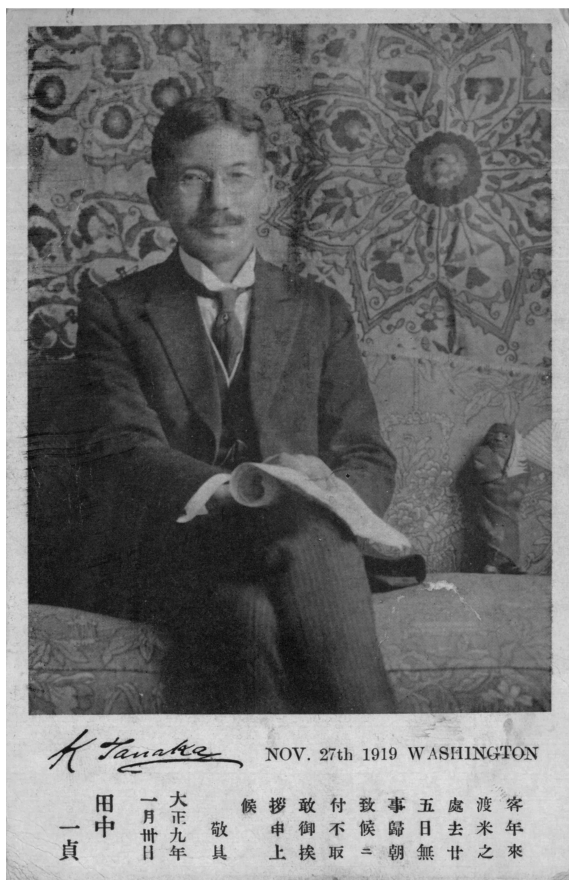
その良太を亡くした一貞もまた、明治二十八年（一八九五）、病気のため郷里に帰り、休学を余儀なくされていた。ちょうど一松の生まれる年にあたる。鶴岡で静養していた折、福沢諭吉から暖かい励ましの手紙を受け、⁽¹⁴⁾それに勇気づけられて復学し、明治二十九年（一八九六）に大学を卒業した。一貞はパリ在任時にも現在の自分があるのは恩師のおかげであると追憶している。⁽¹⁵⁾明治三十年（一八九七）一月、宮崎県延岡の私立学校亮天社の教員となり、明治三十四年（一九〇一）に同校を辞職し、慶應義塾の教員となる。同年五月、慶應義塾第二回海外留学生となり、アメリカ・ヨーロッパを訪問する。アメリカではイェール大学で社会学者サムナー（Sumner, William Graham）に師事、修士号（Master of Arts）を取得、フランスではコレージュ・ド・フランスで社会学者のタルド（Tarde, Gabriel de）の下で社会心理学を学ぶ。明治三十五（三十六）年（一九〇二（三））のパリ留学中には日本人留学生



挿図4 河合新蔵「星裡楼に於ける著者」

などによるパンテオン会にも所属しており、土井晩翠、直木倫太郎、和田英作、白鳥庫吉、中村不折などと交友があり、洋画家の河合新蔵と部屋を分け合っていた。この頃の様子が後の欧米視察旅行の旅行記『世界道中かばんの塵』に懐古的に語られており、口絵には河合新蔵による一貞の肖像が載せられている(挿図4)。⁽¹⁶⁾

明治三十七年(一九〇四)三月、一貞は日本に帰国し、同年四月に慶應義塾文学部第一学年受持教授となる。明治三十八年(一九〇五)四月に慶應義塾書館初代監督(館長)を兼任し、「書館」を「慶應義塾図書館」と名称を変える。一貞は留学中に欧米諸国で訪問した図書館を参考にして、理想の図書館がどうあるべきかを説き、その重要性を主張している。⁽¹⁷⁾ 明治四十年(一九〇七)には、慶應義塾創立五十年を記念して、明治四十五年(一九一〇)五月に赤煉瓦造りの八角塔を備えた図書館(現・慶應義塾大学図書館旧館、重要文化財)が開館した。その後、大正四年(一九一五)十二月、この図書館中央階段に、一貞の発案で、和田英作が下絵を制作した、高さ三間半、幅一間半のステンドグラスが、小川三知によって製作されてい



挿図5 田中一貞 年賀状(鶴岡市郷土資料館蔵)

る。図書館の構想、具体的な設計、装飾意匠には、一貞の経験と知識、留学中に培った人脈が活かされ、こうした本格的な図書館が建設されるに至ったのである。⁽¹⁸⁾

大正二年(一九一三)、一貞は塾長鎌田栄吉とともに欧米の教育視察のため外遊する。この時は馬関から釜山に渡り、シベリア鉄道を経由してヨーロッパ諸国を巡り、イギリス・リヴァプールからニューヨークに渡り、アメリカを横断し、サンフランシスコからホルルル経由で新橋に帰着しており、この旅の様子が先述の『世界道中かばんの塵』に記録されている。大正三年(一九一四)十一月には日本図書館協会の第七代協会長に就任し、大正五年(一九一六)の山形での図書館協会全国大会では一貞が主導的役割を果たしている。⁽¹⁹⁾ 大正八年(一九一九)十月、アメリカ・ワシントンで開催された第一回国際労働会議に鎌田塾長が出席する渡航に随行し、翌年の一月に帰国した。この直後の一貞の年賀状が鶴岡市郷土資料館に所蔵されている(挿図5)。そこには横文字のサインと、この写真が大正八年十一月二十七日に撮影されたもので、「客年来渡米之處去廿五日無事歸朝致候不取敢御挨拶上候 敬具 大正九年一月卅日 田中一貞」と印字されている。温和な表情や品格の漂う佇まいから、慶應義塾の教師評判記に「仏蘭西仕込みの洗練されたる人格」

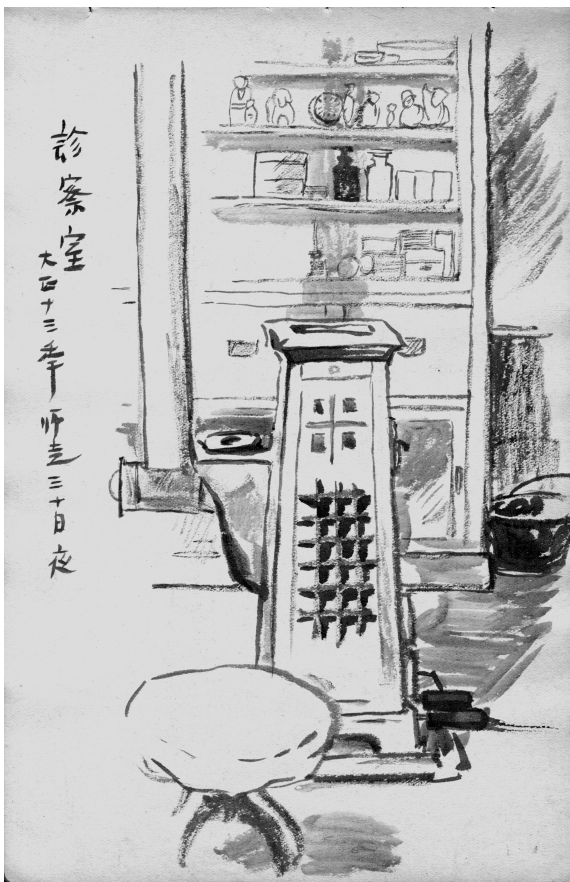
と激賞されるのも領けよう。⁽²⁰⁾ 一貞は生涯に三回、洋行しているが、大学に加え、図書館協会の仕事などもあり、多忙を極めていたようである。大正九年(一九二〇)十月頃から神経衰弱が昂じて不眠症になり、静養を続けていたが、大正十年(一九二一)九月二十二日、脳溢血症のため五十歳で逝去した。⁽²¹⁾

(三) 兄・一郎

遺族の談話では、一松は若い頃のことを、戦争の辛い記憶ゆえかあまり話をしなかったとのことであるが、一松が学生の頃、医者だった兄に経済的支援などいろいろ世話になった、と語っていたという。後述する一松自作の絵葉書で、兄に宛てられたものがあり、そこから兄の名が「一郎」であることがわかる。一寧や一松が掲載されている『新編庄内人名辞典』には一郎の足跡を辿ることができないが、庄内中学校の『卒業生名簿 自明治二十五年 至昭和二年』(山形県立鶴岡中学校、一九四七年)によると、明治三十九年(一九〇六)三月の卒業生のなかに一郎の名前が確認でき、⁽²²⁾そこにはその後の進路が「東大医科」で現在の職業が「開業医」、現住所が「広島市堀川町八十八番地」と掲載されている。東京帝国大学の資料でも、一郎は確かに医学科を大正二(一九一三)三年(一九一三)一四)頃に卒業していることが確認できる。⁽²³⁾さらに広島市関係資料によると、一郎が広島市堀川町に住む医師で、生年月日が明治二十年(一八八七)九月二十日であること、⁽²⁴⁾また大正二年に東京帝国大学医学科を卒業し、同大学で助手、助手を務めた後、大正五年(一九一六)に朝鮮総督府慈恵医院医官として赴任し、大正六年(一九一七)から広島県病院小児科部長を務め、大正十三年(一九二四)に広島市で小児科医を開業していることが判明する。⁽²⁵⁾一郎が朝鮮半島で医官として赴任していたこと、その後広島に赴任することになった経緯は不明であるが、広島病院の小児科部長が欠員だったところ、一郎が任命されたと報じられている。⁽²⁶⁾大正六年十月十八日には広島病院医事集談会で「小児の多発不定筋痙攣の一例」と題して小児医療に関する講演を行うなど啓蒙活動も行っている。⁽²⁷⁾

一松の和歌抄「燈心草舎歌抄」を見ると、一松は大正八年(一九一九)四月から毎年のように広島を訪れていることがわかる。和歌とくくわずかな情報を書き添え

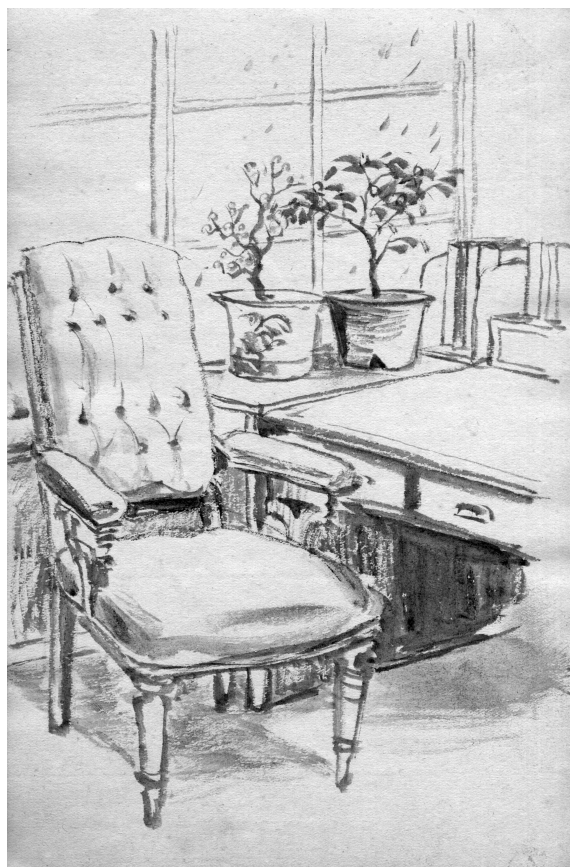
られているのみで、兄のことはほとんど書かれていないが、状況から一松が兄を訪問していることは自明である。大正十三年十二月には「広島に帰省」とあり、兄と、鶴岡から移住した両親とともに新年を迎えている。⁽²⁸⁾さらにこの和歌抄とは別に、この帰省に携行されたスケッチブックが田中一松資料に含まれており、旅の様子が記録されている。十二月二十七日夜十時に東京駅を発ち、「落ちつかぬ発車間際の窓あけて送るひとなきわれをさびしむ」という歌が詠まれ、「よる二時箱根を越す」、「静岡駅夜三時」、「十二月二十九日よる三時 岡山附近」、「垂乳根の母の笑顔をしのびつつ今ぞ下りたつ廣島の驛」など、道中の記述や歌、汽車の座席で眠る人々の姿などがスケッチされている。そして無事に広島に到着し、「兄の診察室にて」と題された歌が記されるほか、「診察室 大正十三年師走三十日夜」と題された墨画(挿図6)には、奥には薬瓶などが並べられた棚、中央に煙が立ち上るストーブ、手前には丸椅子が置かれている。この裏面には「あた、かにくすりのにほいしみわたる診察室のまどに雪ふる」と和歌が書かれている。雪の降る寒い年の瀬に、真新しい兄の診察室で、家族の温かさにふれている様子が想像される。その次頁には、革張りの肘掛け椅子と机、窓側には盆栽であろうか、二つの植木鉢が置かれている室



挿図6 田中一松「兄の診察室」



挿図8 田中一松「白梅図」



挿図7 田中一松「兄の椅子」



挿図9 田中一郎

内の様子が描かれている(挿図7)。この椅子は兄が診察の際に座るものである。窓枠の内側には、点描が確認でき、前掲の和歌から推測すれば、雪を描き表しているのかもしれない。これらのスケッチは、こうした事情を知らずに見れば、一松が病氣にでもなつて通院した際のものとして何でもない日常の一コマとして描かれたものと見過ごしてしまふのであるが、複数の情報を重ね合わせてみると、一松の兄に対する思いの詰まったスケッチであることが理解される。診察室の椅子は留守模様で兄の肖像として描かれているかのである。さらにこれに続く頁には「ち・母のはなれの部屋の床の間に咲きの盛りの白梅ぞこれ 大正十四年正月六日」の和歌と、小さいながらも満開の梅の盆栽の鉢が描かれている(挿図8)。一郎の開業医としてのスタートに合わせて、一寧の移住が行われたわけであるが、故郷を離れた寂しさというよりは、頼もしい長男とともに新天地での隠居生活を楽しんでいる老夫婦の姿が想像される。この頃から一松も東京帝室博物館美術課で仕事を始めることに鑑みれば、一寧夫妻にとって、二人の息子がそれぞれ立派な仕事をするようになったことに安心感を持っていたことは想像に難くない。

昭和三年(一九二八)に開局した日本放送協会広島局のラジオ放送の幼児教育や家庭の医学をテーマにした番組で、一郎は「離乳の注意」と題して子供を乳離れさせる際の注意点を講演しており、翌年発行された講演録には、一郎の肖像写真が掲載されている(挿図9)。全二十件の講演のうち、五件が医学に関するもので、他の四人の講師が医学博士であるなか、一郎は「医学士」として講師となっている。講演の内容は小児科医としての一郎の知識や経験に基づく具体的なものとなっており、地域で信望の篤い小児科医として活躍していたと考えられよう。戦況が悪化するも一郎は「防空業務従事令書」によって医師として広島に留まらざるを得ず、昭和二十年(一九四五)八月六日、一郎は爆心地にほど近い十日市町へ往診中に被爆し、八月十四日に五十七歳で亡くなった⁽³¹⁾。

以上、かなり私的な内容にも踏み込んでしまったものの、確認できる事実を並べてみると、一松は、叔父、父（おそらく母も）、兄を突然失っていることがわかる。関東大震災⁽³²⁾や太平洋戦争で被災する人が少なくなかった時代とはいえ、その悲痛の大きさは計り知れない。一松による、若い瑞々しさが充溢したスケッチブックや、国宝など名品ばかりがずらりと並んでいるような調書だけを見れば、エリート街道をまっしぐらの、豊かな充実した時間を満喫しているかのように感じられるが、家族の状況を照らし合わせれば、艱難辛苦の前半生とも見ることができよう。一松にとって和歌は、寂しい時に私的に詠じるものであって、公にするつもりはなかったのであろうが、「燈心草舎歌抄」には、かなり消極的で、悲しき、寂しさを表した歌が多い⁽³³⁾。大正五年（一九一六）九月に一高に入学した直後には、「出来そうな人ばかりなり今にして我が愚かさを知りしにあらねど」など、意気揚々と学生生活を謳歌するような心境からはほど遠い、切実な心細さを表した歌が詠まれている。兄の一郎が明治三十九年（一九〇六）に鶴岡から上京し、一貞の家に下宿しながら学生生活を送っていたのに対して、一松は一高入学時に学生寮に入っている。一貞・光子夫妻には明治三十七年（一九〇四）生まれの長女・俊子を年頭に一男三女の子供⁽³⁴⁾がいた。一松が一貞邸に下宿する余裕はなかったものと推測される。大正九年（一九二〇）一月、東京帝国大学に入学して数ヶ月後には「図書館をわが宿として幾月か機械の如く暮らしけるはや」など、疲れ切ったような歌も見られる。兄は大正五年に朝鮮半島に渡り、翌年には広島に居を構えていたこと、叔父は大学に加えて図書館協会の仕事に奔走していたことに鑑みれば、身内に弱音を吐くこともできず、寂しさを紛らわすためにひたすら「一高―帝大」の名に恥じぬように勉強に没頭しているように見える。

そして大正十年（一九二一）六月、鶴岡の祖母が亡くなった三ヶ月後には、「死よ来たれ我が目の前に死よ来たれ我を鞭打つもの外になし」と緊迫感のある歌が詠まれている。そして、さらに三ヶ月後、「叔父長逝（九月二十二日）おのづから逝きかへらぬその人の羨まれぬる秋の風かな」との和歌が記されている。「おのづから」の真意を確かめる術はないが、栄光の只中に見るように見える叔父が精神疾患の末に亡くなったことへの衝撃の大きさは想像に余りある。そしてそれを二十六歳の一

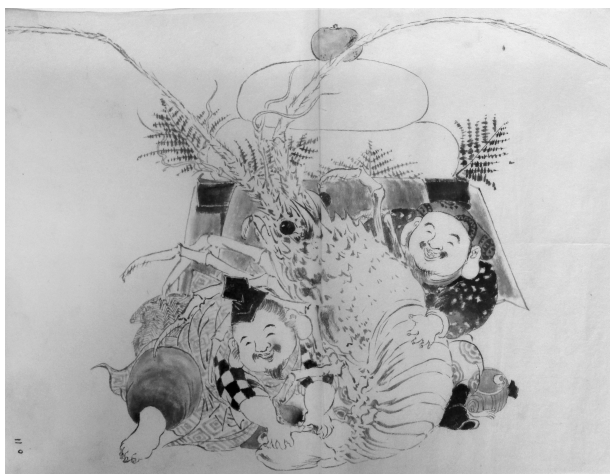
松が羨む、ということをとどのように理解すればよいだろうか。この年の十二月には「宿もいや図書館もいや街もいや身の置きどころなき師走かな」という厭世に満ちた歌や、「年逝くと思ひかへせば思ひ出のあまり悲しき今年なりけり」という悲嘆に暮れる歌が見られる。戦前は身近な人を亡くすことは珍しいことではなく、明日は我が身、という認識を多くの人が持っていたであろう。大正十四年（一九二五）正月、広島から帰京後、一松は「風邪臥床 若くして逝きにし友を数ふれば二つの手にも餘りぬるかな」と詠じ、同年十一月には「この心いかが歌はぬ思ひ出に涙親しく胸なごみつ」という歌を詠んでいる。このまま泣き暮らしていたら、美術史家・田中一松は生まれなかったであろう。悲しみの淵から立ち上がるような精神的な支えとなったのは、絵に対する飽くなき探究心、自分の眼でよく見て、手で写すという求道者のような営みではなかったかと想像する。以下、一松が描いたものから、その軌跡を辿ることとする。

二 一松の絵

一松はその生涯に手がけた書籍は約一〇〇冊、論文は三五〇本余と、著述による研究業績が膨大であるが、絵を描くという行為は幼少の頃より生涯にわたって行われた。一松と交流もあり、巧みなスケッチを伴う調査ノートを残している土居次義は、幼い頃から絵を描くのが好きで、中学時代には画家になりたいと思っていたとも語っているが、一松には画家になりたかったというような発言は現時点では確認できていない。一松にとって「描く」という行為は、もちろん好きなことであったと思われるが、晩年、鶴岡での講演の際に「長年、中央で仕事をしてきた」と述べていることから、ものの形を写すということが、記録の素養あるいは公務の調査を行う手段の一つであったのではないかと思われる。先述のように現在、東京文化財研究所で所蔵する田中一松資料は、平成二十年（二〇〇八）に出光美術館から寄贈されたものであるが、その後、平成二十八年（二〇一六）三月に追加してスケッチブックや画帳、自作の絵葉書などが同館から寄贈された。研究とは無関係のたわいない私的記録のように見えるが、一松少年が成長した時代や風潮をよく示している資料として注目に値する。時代順に紹介していきたい。

(一)「筆のまにまに」

三四・五×二五・八cmの半紙百枚に絵を描き、表紙に「筆のまにまに」と墨書し、裏表紙裏には菊の意匠とともに「明治卅八年十二月ヨリ書ク 全四十年四月十八日終ル 山形縣西田川郡大宝寺町大字大宝寺字大法寺地 六百二十二番地 此主 田中一松」と奥付が記されている。「明治卅八年」の脇にはボールペンで「朝陽尋常小学校三年生」、「全四十年」の左脇には同様に「(小学尋常五年生)」と記入されている。この書き込みは先に見た和歌をまとめたノート「燈心草舎歌抄」に年齢などを書き加えているのと同じ、晩年の一松が書き入れたものと見られる。絵は一紙を一図としたもの、二分割あるいは四、八分割した枠内に、花鳥・風景・名所絵・人物・動物など多種多様な画題が描かれている。墨のみで描かれたものもあるが、彩色されているものも多い。二十頁目の墨画(挿図10)は鏡餅の前で、満面の笑みの恵比寿・大黒天が伊勢海老と組み合う戯画が描かれている。伊勢海老の殻のゴツゴツした質感、恵比寿・大黒天のふくよかな体つきなど、細部まで入念に書き込まれており、描線にもたどたどしいところがない。絵手本のようなものを参照して描かれた可能性も考えられる。また三十五頁・五十三頁は縦に四分割し、



挿図10 田中一松 「筆のまにまに」20頁

れた可能性も考えられる。また三十五頁・五十三頁は縦に四分割し、
 姫竹と燕子花、黒い熊に乗る金太郎と、犬に乗る軍服姿の少年(挿図11)、旭日を背に桃から生まれ出る桃太郎、国旗を揚げた藁葺き屋根の家、旭日旗を肩に担いだ軍服姿の犬、兎を従えた金太郎(挿図12)が描かれている。明治三十八〜四十年(一九〇五〜〇七)といえ、日本では日露戦争の勝利に沸き、印刷技術の向上によってマンガ雑誌やポスター絵が数多く出版され、人気を博していた。一松



挿図12 田中一松 「筆のまにまに」53頁



挿図11 田中一松 「筆のまにまに」35頁



挿図13 『お伽絵はなし 第二編 軍国の金太郎』表紙



挿図14 『お伽絵はなし 第二編 軍国の金太郎』2頁



挿図15 田中一松 一貞宛年賀状 明治42年1月

の描いた金太郎は、『お伽絵はなし 第二編 軍国の金太郎』（尾竹国観・竹坡合作、甲辰社、一九〇五年）と同じ図様が確認でき、その表紙（挿図13）と、豚と鶏に馬鹿にされる金太郎の図（挿図14）の部分を書いたものであることがわかる。³⁶このほかにも、この「筆のまにまに」には、多くの戦争風刺画やポンチ絵を写したものが見られる。全体的に見て、各図は自由に独創的に描いたというよりは、雑誌か何かを写したものが多いような印象を受ける。一松が見て、目にとまったものを写し、一年五ヶ月で百枚分の絵を描いている。絵を専らとするならば多くはない数であろうが、余暇の手すさびにはは気合いが入っており、表紙をつけ、通し番号を振っていることから、真剣に描きためたような姿勢が感じられる。一松にとって、多くのものを見て、自分の手で書き写す、という行為は十歳の時点ですでに始まっていると言える。

（二）自作の絵葉書

先述の通り、一頁が一松の叔父であることが判明するきっかけとなったのが、一

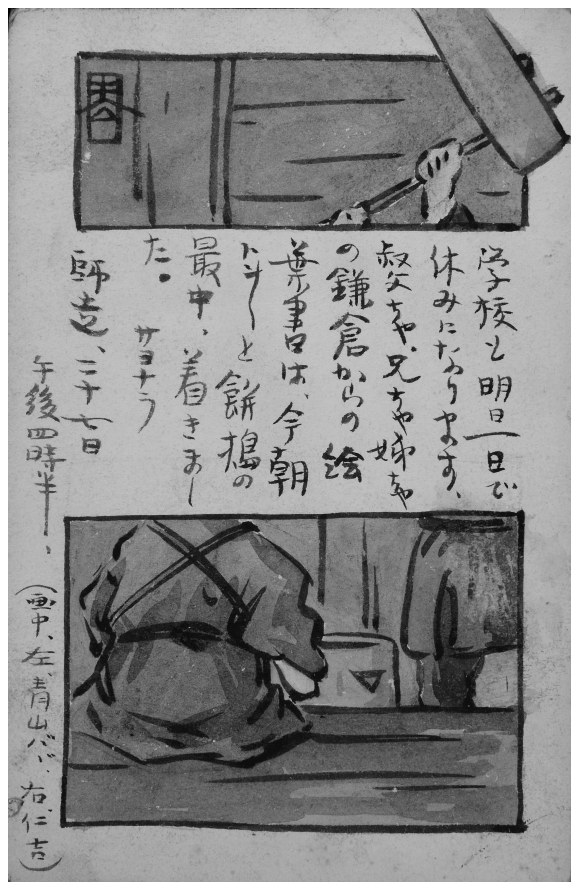
松自作の年賀状である。一松から一貞に宛てられた葉書が二通、現存している。明治四十二年（一九〇九）のもの（挿図15）は叔父夫妻に宛てた年賀状で、次のように墨書されている。

謹奉賀新年 當地、昨日より降雪みぞれとなり、あられとかわつて今はボタン雪となつて寒気甚だしく皆（消し字）あります。此画は家の戸の口です。一月一日

裏面には雪化粧した家の入り口が表され、「御名刺 田中」と書かれた郵便・名刺受け、筆と帳面が吊り下げられている。入り口の左下に松の一枝と笹らしき緑色の葉が置かれているのは、門松であろうか。素朴な画風でふるさとの実家の様子を、東京で暮らす叔父に伝えようとしている。また明治四十二年十二月のもの（挿図16）には餅つきの様子が大胆にトリミングした構図で描かれ、左上には「一松」がモノグラムのように表され、表裏に近況が記されている。



挿図17 田中一松 一郎宛年賀状 明治43年1月



挿図16 田中一松 一貞宛年賀状 明治42年12月

(表) 今日、餅搗なので内では、御騒ぎ、僕は学校があるので、うまい「フカシ」を食べることも、餅をおすことも出来なかったのは残念でした。当地、雪は二三寸ありますが、今日、少し太陽が光ったので、道はグチャクになりました。

(裏) 学校も明日一日で休みになります。叔父ちや、兄ちや、姉ちやの鎌倉からの絵葉書は、今朝トシと餅搗の最中、着きました。サヨナラ 師走二十七日午後四時半、(画)中、左、青山バ、右仁吉

絵葉書の限られた画面のなかに、故郷の実家の様子を叔父に伝えようとする工夫が凝らされている。またこの文章から、一貞からも一郎らと小旅行で訪れたのであるのか、鎌倉から絵葉書を鶴岡に送っていることがわかる。⁽³⁷⁾ この時一松は十四歳、小学校を卒業して庄内中学校に入学している。墨書の書風は、幼稚なところがなく、青年期以降の筆跡の書風と大きくは変わらず、ほぼ完成していると言つてよい。鶴岡の一松少年は、洋行帰りの学者の叔父を誇らしく思っていたことである。⁽³⁸⁾ ちょうど同じ年、一貞は『福翁訓話』に次の文章を寄せている。

用事がなくとも親に手紙を出せと訓誡せられき 慶應義塾大學教授 田中一貞
(一) 慶應義塾在學中、福澤先生より受けたる訓誡は凡て深く心に銘して、今日も日常動作の指針となつて居るが、多くの貴き訓誡の中にも如何なる故か、先生が學生に向ひ親孝行と云ふことを説かれ、親は誠に子の身の上を案ずるものなれば、必ず毎週手紙を家郷に送ることを忘れてはならぬぞよ、用事がなければ、用事が無いと書いて遣れと云はれた事は常に思ひ浮ばれて、實は東京に居る間も、外國留學中も先生の此の訓誡を服膺して頻繁に老母と家兄には手紙を出し、見聞せる事、経験せる事は細大漏さず報告する事を怠らず、今日も其通りに遣つて居るのである。(後略)

この文章が事実とすれば一松は幼少の頃から、叔父が東京やアメリカ、ヨーロッパの遠い国々から鶴岡に送ってくる葉書を見ていたはずである。

さらに挿図17は明治四十三年（一九一〇）元旦、兄・一郎宛ての年賀状で、裏面には西洋無花果・日本無花果の木が雪囲いされている裏庭の様子が水彩画で表されている。一郎は、一高から帝大に進学した頃かと推測されるが、郷里を離れて東京で勉強する兄に、実家の様子を知らせようとしていることがわかる。

こうした絵葉書も、一松が絵を好み、得意であったから叔父や兄に送った、というだけでなく、時を同じくして国内外で絵葉書の大流行が起きていたことがその背景にあると考えられる。³⁹一八六九年、オーストリア・ハンガリー帝国において世界で初めての官製葉書が発行されて以降、またたく間にヨーロッパ諸国に葉書が普及し、十九世紀末には私製絵葉書ブームが起きていた。日本でも日露戦争後、絵葉書ブームの頂点と言える状況にあった。⁴⁰『みづゑ』の創刊者である大下藤次郎は、絵葉書についての随筆六十篇をまとめた『絵葉書趣味』に次の文章を寄せている。⁴¹

肉筆絵葉書

△近來絵葉書の流行に連れて、交際を望む人が多くなって来たが、廣く集めるうちには同じものが二枚も三枚も来る恐れがある。

△自作の絵葉書には此弊がない。同じ題目、同じ物體を寫しても繪には幾分か異った點がある。随て印刷されたものより趣味が饒かである。

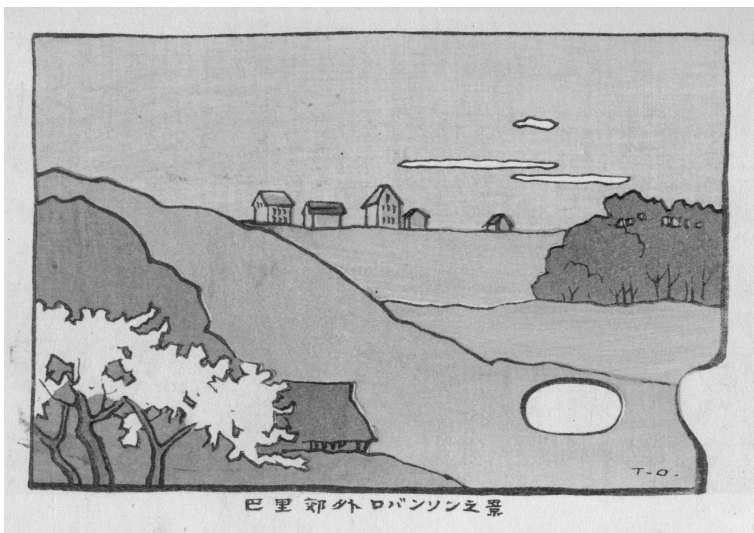
△自筆絵葉書は假令繪が巧でなくても儘に至情が籠つてゐるため、貰つたものも一層有難味を覺える譯である。

△この様な理由からして、自筆の絵葉書は今後ますます流行すると思ふ。それ故是から自分で描いて見やうと思ふ諸君へ、私の心づいたことを二つ三つ申上やう。

△絵葉書をかくには水彩畫が一番適當である。（我田引水ではない）油繪は面倒であるし、鉛筆畫は磨れる恐れがある。日本繪では旅行先などの眞景を傳へるに充分でない。（後略）

一松自作の絵葉書は大下の提言を實踐したかのようである。一松はこれ以外にも多くの絵葉書を描いては身内や知己に送っていたのではないかと推測される。通常

は手紙や葉書は差出人のところには残らないはずのものであるが、ここにあげた三通の葉書が最終的に一松のもとにあったのは、一貞の没後いずれかの時期に、遺族が一松に戻したためと考えられる。そして一貞と大下藤次郎の間には親交があったことにも注目される。先にふれた『世界道中かばんの塵』には一貞が謝辞に「此書の花は挿畫にある」と述べている通り、和田英作、鹿子木孟郎らの口絵・挿図が数多く掲載されているなかに、大下による作品も二点含まれている。挿図18は「ロバンソンの景」と題されたもので、大下の原画を元にした多色木版画が口絵として掲載されている。パレットの形に区切った画面に、のどかな風景が表され、右下には「T. O.」のイニシャルが書き込まれている。これについて一貞は「巴里郊外、ロバンソンの景は、春の一日、大下君が余と共にロバンソンに散策して、花下に語りひ合ひし其の夕べ、同君が描かれたもので、今は傷ましい哉、亡友の形見となつて



挿図18 大下藤次郎「ロバンソンの景」 明治35年

了まった。」と述べている。⁽⁴²⁾一貞と大下が出会った時期は不明ながら、大下はアメリカからヨーロッパに渡った折、一九〇二年四月七日から五月三日までパリに滞り⁽⁴³⁾しており、一貞が慶應義塾の海外留学生として渡航していた頃にあたる。一貞を通じて、大下の作品や水彩画法についてふれていたかどうかは定かでないが、一松のスケッチブックを見ると、大下の影響があつた可能性も考えられる。続いて一松によるスケッチブックについて見ていきたい。

(三) スケッチブック

現在、東京文化財研究所では一松によるスケッチブックを八冊、所蔵している。便宜上、次の通り番号をつけ、内容を紹介する。

- ① 写生帖・明治四十年九月～同四十一年五月
- ② スケッチブック・明治四十四年三月～七月
- ③ スケッチブック・明治四十四年八月～十月
- ④ スケッチブック・明治四十四年十一月～同四十五年六月
- ⑤ スケッチブック・大正元年十一月～同三年三月
- ⑥ スケッチブック・大正三年一月～二月(後半白紙)
- ⑦ スケッチブック・大正十二年十二月～同十三年一月
- ⑧ スケッチブック・大正十三年七月～同十五年二月

①には表紙に「写生帖」と墨書され、表に風景・花などを水彩画で表し、裏にその絵を書いた年月日とタイトルを記し、最後の頁には「スケッチ【目録】」として三十点の絵のタイトルを列挙している。たとえば「鳥海の夕照(我家より北方ヲノゾム)」(明治四十一年四月十日)(挿図19)では家々の屋根と上空から近景の樹木の枝が垂下し、雪の積もった鳥海山を夕映えのなかに描いているが、右下に一松のイニシャルの「I. T.」がモノグラムのように描き込まれている。大下藤次郎の作品にも「甲斐駒ヶ嶽」(「みづゑ」三十一、明治四十年十二月)(挿図20)のように、「I. T.」をモノグラムにして描き込んでいる作品が散見される。また②～④はほとんど



挿図21 田中一松 自画像 明治44年9月



挿図19 田中一松 鳥海の夕照 明治41年4月



挿図20 大下藤次郎「甲斐駒ヶ嶽」 明治40年12月



挿図24 田中一松 スケッチ(模写) 大正3年1月



挿図22 田中一松 スケッチ(風景) 大正元年11月



挿図23 田中一松 スケッチ(人物) 大正元年11月

が鉛筆のみで描かれ、自画像(挿図21)や身の周りの風景、友人がスケッチしている後ろ姿を鉛筆でスケッチしているが、⑤には大正元年(一九一二年)十一月二十四日に九頁にわたり樹木や立ち並ぶ家々(挿図22)、少女たちが本を読む様子(挿図23)など日常的な風景を描いており、線描を省略する一方で陰影を明確に描き分けるなど、学生の趣味の鉛筆画とはいえ、味わい深いものがある。また⑥にはデューラー、ポッティエリ、アングルなどの西洋絵画の模写ばかりが描かれている(挿図24)。システリア礼拝堂のミケランジェロによる天井画のデルフォイの巫女の模写には「ワチカノ宮 システリア礼拝堂壁画 ミケランジェロ筆」[Jan 17th 一巻]と書かれている。鶴岡の風景ばかりが描かれているなかに、こうした西洋絵画の模写が一松のスケッチブックに見えるのは、唐突なようにも思われるが、先述の通り、この頃一頁は『世界道中かばんの塵』の旅の真つ最中で、大正二年(一九一三)七月に一頁はローマを訪れ、サンピエトロ寺院にも行っている⁽⁴⁴⁾。このスケッチは大正三年(一九一四)一月十七日に描かれており、一頁はその三ヶ月後に帰国している。一頁がこのデルフォイの巫女の絵葉書を買って鶴岡の実家に送り、それを見た一松がスケッチブックに模写をした可能性が高いと考えられる。一頁は図書館長という立場上、旅の各地で図書館を訪れているが、美術についても造詣が深く、たとえばドイツのライプツィヒからラファエロの聖母子を見るためにドレスデンの絵画館を訪れている⁽⁴⁵⁾ほか、ヴェネツィアではお目当ての作品が美術館のなかで見つからず、露店でその絵の絵葉書を見つけて買い求め、通りすがりの人々にこの絵がどこにあるかを必死に聞いて「渴望の名畫」を見る⁽⁴⁶⁾など、かなり意欲的に西洋絵画を見て回っている。先述のように一頁が旅先から手紙を出していたとすれば、鶴岡の一寧・一松のもとには絵葉書が、日本には未だ図録などが入っていない作品の画像が直輸入で届いていたと考えられ、日常的に身の周りのものを写していた一松が西洋絵画の模写をするのも至極当然のことと思われる。そしてこのことは、全く初めて目にするものをよく見て写すという、後の作品調査の記録の修練となっていたのではないかと推測される。本小稿においてはこれらのスケッチブックの全貌を伝えることはできないが、いずれスケッチブックの全ページの画像をオープンアクセスで公開することを計画している。

(四) 作品調査ノート

「昭和の古画備考」と称される一松の作品調査は、実は大正年間にすでに始まっている。田中一松資料の調査ノートについては、かつてその概要を報じているが、⁽⁴⁷⁾先述の家族関係や細かい事跡については全く把握していなかったため、再考を要すると自省している。ノートの形で調査記録をまとめたものは大正十二年（一九二三）から昭和六年（一九三一）までの二十九冊、それ以降はB5サイズの原稿用紙や便箋に書き、作家や流派、時代、ジャンルごとにまとめていく形式に変化する。調査ノートとしては最も古い「美術巡禮No.1」と書かれたノートは、大正十二年五月八日から十二日までの五日間、それに続く「古美術巡禮No.2」と書かれたノートは、大正十二年五月十二日から十七日までの六日間の調査の記録で、空白もあるもの九十二頁ほどのノート二冊を十一日間で書き切っている。先述の通り、一松は大正十二年三月に大学を卒業し、四月から高輪中学校に奉職している。「燈心草舎歌抄二」には自ら「高輪中学 講師」と書いているが、同校での職務や体制が不明のため、休暇を取得して調査旅行に来ているのか不明であるが、いずれにしても一松はこの十一日間で、京都・奈良の古刹を巡り、彫刻を中心とした調査記録を残している。一松の三歳年長で東大の先輩である丸尾彰三郎と七歳下で当時学生だった田澤坦とともに寺を巡っている。図版一(a)の海住山寺奥之院十一面観音立像の調査では、観音像の立体感を描写し、右頁では側面の目の部分を拡大するなど、細部の状態も入念に観察している。「左手ハ肘ヨリ上新シク補ヒタリ、左右ノ天衣（飾巾）ハ後ノモノ（墨塗）」など後補の様子についても記録している。この二冊は旅の記録としての色合いも濃いだが、一松の本領を発揮して調査ノートが書かれるようになるのが、大正十三年十二月に東京帝室博物館に奉職して以降である。図版一(b)の鳥獣戯画断簡の調書のように、博物館の陳列に並ぶ絵画作品を端から調査し、絵巻であれば詞書、掛軸であれば画賛などを全文筆写し、図様を模写し、落款・印章を描き留め、本紙や紙継ぎ、印の寸法などを測っている。

特に一松が関心を寄せていた絵巻物については、ノートの表紙に「巻十五 絵巻物」と朱書きし、見返しには朱筆で「かつひろげかつよきながめこれの繪巻 つばらくにみれどあかなくに 一姿」と一首が書かれている。冒頭に目次をつけ、十

六点の作品が列挙されている。絵巻のみを集めて調査ノートにしていることから、多少の時間の幅があるが、大正十四〜十五年（一九二五〜二六）の頃のものと思われる。狩野養信による「中殿御会図」模本（東京国立博物館）についてはノート十五頁にわたって詞書・絵・奥書などの情報が書き留められている。この模本は、宮中に秘蔵されていた鎌倉時代の絵巻を神祇伯白川雅喬が勅許を得て模写し、さらにそれを舟橋（清原）経賢が寛文八年（一六六八）に写したものを十九世紀に養信が模写したもので、それを一松が写す、ということと四度目のコピーであることがわかる（図版二(a)）。一松にとっては、養信作品を写しているのではなく、写し継いできた鎌倉時代の絵巻の原本に思いを寄せているようにも見える。絵巻の図様は簡略に写されているが、さらに原本の詞書筆者とされる藤原行能と、絵の筆者とされる藤原信實の部分とを別の和紙に墨描きし、この頁に貼り込んであるほか、さらに一松は別の和紙に公卿たちの居並ぶ姿を墨で描き、彩色も施している（図版二(b)）。

このノートを筆写するのにどのくらいの時間を要するであろうかと考えてしまおうが、おそらくは数時間、さほど長い時間は掛けていないものと推測される。ノート一冊を書き切る時間の短さは、記録速度の速さを意味している。そして数多くの作品を調査していくに連れ、作家ごと、ジャンルごとに調査をまとめていく必要が生じてきて、一松はノートから原稿用紙に調査を書くことにシフトしたのだと思われる。後から参照する際には、適切に分類されている方が便利だからである。原稿用紙に記された調査は一万五千件以上あり、昭和九年（一九三四）以降、晩年までこの形式で調査が作成されていった。多い年では一年間に三百件以上の調査を書いている。一松の膨大な調査の全貌をアナログ媒体で再現することは不可能であるが、今後の公開活用に向けて、デジタルの利点を活かしたアーカイブ構築を進めている次第である。

おわりに

本稿において、美術史家・田中一松の家族関係や知られざる側面に光を当てることにより、その研究および文化財行政業務の基盤形成について考察した。一松は自らの調査のスケッチについて、第二次大戦前後の世の変動のなかでは絵画が売りに

よって転々として行方のわからない作品も少なくなかったため、今後の捜査にも備えられるように、図様を描き写していたと語っている⁽⁴⁸⁾。昭和十八年（一九四三）には判明するものだけでも年間三二〇件の調書を書き残している。文字のみの調書も多いが、かなり省略されていては図様をスケッチしたのも少なくない。たとえば「周文筆山水図」という情報だけでは作品は特定できないが、部分的にでも特徴が記録されていれば、捜索の手がかりになることは間違いない。このように見てくると、一松は絵が好きで写していたのではない、上手に絵を写そうとしていたのではない、ということが理解できよう。そして膨大な数の作品を見ていた一松のなかには、壮大な作品データベースが形成されていたことであろう。かつての学生は書籍や論文を読み、文章を自分の手で筆写していたが、電子複写が普及するようになって、学生は勉強をしなくなったとか、美術史研究者が写真撮るようになってモノを見なくなった、と揶揄されて久しく、さらに現代では、コピーも写真も撮らなくなっているという。必要な時にウェブサイトで見られるものも多いからである。一松が本格的に美術品調査を始めた頃は、まだ美術の書籍なども限られており、画像を手軽に見ることができなかつたため、すべての情報は手で写すということが基本であった。便利な世の中になって、我々は進化しただろうか。人間としての能力は退化・劣化が進む一方のように感じられる。しかしながら今にして自分の愚かさを知ったわけではなく、文化財アーカイブの拡充を進める以外に活路はない。そもそも美術はアナログであり、手書きの調書もアナログであるが、高精細画像、データ検索機能やソート技術など、デジタルの利点を活かして、今後の活用と新たな研究が始まるような情報基盤の形成に努めたい。

註

- (1) 高田修「刊行の辞」、田中一松『日本絵画史論集』、中央公論美術出版、一九六六年。
- (2) 『受贈図書 田中文庫目録』出光美術館、二〇〇八年。
- (3) 田中一松資料を初めて一般公開したのは、千葉市美術館での「ドラッカー・コレクション 珠玉の水墨画―「マネジメントの父」が愛した日本の美」展（二〇一五年五月十九日～六月二十八日）である。世界的な経営学者であるピーター・F・ド

ラッカー（一九〇九～二〇〇五）は日本美術、特に室町水墨画を愛好し、作品を収集するにあたり、田中一松を師と仰いでいた関係から、ドラッカーから田中への書簡、ドラッカーの所蔵作品の調書などが田中一松資料に含まれている。両者の親交については同展図録に収載の松尾知子「田中一松資料にみるドラッカー・コレクションの軌跡」に詳しい。

また以下の二つの展覧会で、複数の美術史研究者による調査ノートとともに田中一松資料を出陳した。「記録された日本美術史―相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」実践女子大学香雪記念資料館（二〇一八年五月十二日～六月十六日）、京都工芸繊維大学工芸資料館（同年六月二十五日～八月十一日）、同名のパンフレットを刊行、特集展示「日本美術の記録と評価―調査ノートにみる美術史研究のあゆみ」東京国立博物館本館十四室（二〇二〇年七月十四日～八月二十三日）。展覧会に合わせて特設サイトを制作し、展示資料の画像や書き下し文の閲覧やリーフレットのダウンロードができるウェブ展覧会とし、実際の展覧会終了後も公開を継続している。 <https://www.robunken.go.jp/exhibition/202007/>

- (4) 『鶴岡市史』下巻、一六九頁、鶴岡市、一九七五年を参照。
 - (5) 吉田鋭雄・稲束猛「田中桐江」「池田人物誌」上、太陽日報社、一九二三年および「池田文化と大坂―「禅悟廬文庫」「蝸牛廬文庫」を中心に」展図録、池田市立歴史民俗資料館、一九九二年を参照。
 - (6) 田中一貞「番傘日記」「三田評論」大正四年三月号（二二二号）、一九一五年。
 - (7) 吉田鋭雄編『田中桐江傳』池田史談会、一九二三年。
 - (8) 『杵邨詩稿』は私家版として出版された。東京日本橋の一番星画廊に保管のものを閲覧。和綴本で本文は活字であるが奥付はなく、本文の校正が書き入れられているため、校訂本とみられる。裏表紙裏には「昭和十一年九月五日発行、著者・廣島市上流川町一〇・田中一寧、印刷所・廣島市千田町三丁目・藤浦印刷所」と手書きされている。この手書きの奥書は一松の筆跡であるとみられ、父の漢詩集の刊行に助力していると推測される。
- 一番星画廊には、この『杵邨詩稿』のほか一松の青年期の自作の和歌抄（『燈心草舎歌抄』三冊、大正四年～昭和四年）、大学時代のノート、晩年の手帳などが保管されている。一番星画廊の創業者である星忠伸（一九四七～二〇一八）は画商として働き始めた頃、昭和五十二年（一九七七）に僧侶で作家の今東光の紹介により、一松の知己となった。たまたま星は田中家の近所に住んでいたことから、一松の運転手を買って出て、日常的に親交を深めていくなかで、一松から古美術の手ほどきを受けたという。一松の没後、業務や研究に関する資料は出光美術館に寄贈された

ものの、プライベートのものは星が譲り受けたという。星佳奈氏のご教示による。

- (9) 一寧の写真の裏面の記載は以下の通り。「石井子龍翁ハ文化文政時代ノ南画家ニシテ庄内藩士。性曠達ニシテ酒ヲ嗜ミ、常ニ一瓢ヲ携フ。人呼ビテ瓢翁ト名ヅク。後ニ金峯山麓ノ新山(丹山)ニ草庵ヲ結ビ隱棲シテ畫ニ専念シ、退筆ヲ庵側ニ埋メ、天然石ヲ以テ之ヲ標ス。筆塚是ナリ。筆者ハ翁ノ外曾孫ニシテ幼少ヨリ數々此地ニ遊ビ、近ク昭和八年五月、廣嶋ヨリ重ネテ筆塚ヲ訪ヒ撮影セシモノ此ノ一様ナリ。」石井子龍の事跡については、野村敏恵編「石井子龍發憤畫法を悟る」「石井子龍丹山幽居」「統地方美談」保全堂、一九一九年を参照。

- (10) 前掲註8でふれた一松の和歌抄はノートの表紙に「燈心草舎歌抄一〇三」(一番星画廊蔵)と書かれ、大正四年(一九一五)から昭和四年(一九二九)にかけての十五箇年間に及び、季節の歌、恋の歌、雑歌など二千首余が綴られ、ときおりその年の出来事が添えられている。歌を詠んだその場で書き連ねていく、というよりは、日々の手帖などに書き留めたものをまとめたような印象を受ける。ちなみに「燈心草舎」は一松の堂号で、昭和初期から昭和三十年代頃の調書に用いられている用紙には「燈心草舎用箋」と印字されている原稿用紙も散見される。一松自身が自らの堂号を入れた原稿用紙を作成していたとみられる。

- (11) 『新編庄内人名辞典』庄内人名辞典刊行会、一九八六年。

- (12) 田中一貞が一松の叔父であると判明した端緒は、前掲註3の平成三十年(二〇一八)の実践女子大学香雪記念資料館での展覧会に、一松から一貞に宛てられた葉書を出陳したことによる。児島薫氏から資料の所在等のご教示を頂いた。児島薫「男性同盟」としてのパンテオン会『パリ一九〇〇年・日本人留學生の交遊』パンテオン会雑誌「資料と研究」ブリュッケ、二〇〇四年を参照。

- (13) 『橋牛兄弟』有朋館、一九一五年(『高山橋牛研究資料集』第一卷(橋牛兄弟・人文)、クレス出版、二〇一四年に再録)。

- (14) 「二五七五 田中一貞宛 明治二十八年十二月二十四日」『福澤論吉全集 第十八卷(書翰集 第二、明治十九〜三十三年)、慶應義塾編、岩波書店、一九六二年。

- (15) 星裡樓之住人某「先師の佛」『パンテオン会雑誌』第三、前掲註12、一〇四〜一〇六頁を参照。一貞が一九〇二〜〇三年にパリ留学中に住んでいたロモン通り四番地(4 Rue Lhomond)のアパートの五階の部屋は、「星裡閣」(窓から星が見えることから、中村不折が命名)と呼ばれ、星裡樓之住人某は一貞のペンネームである。

- (16) 田中一貞『世界道中かばんの塵』岸田書店、一九一五年。

- (17) 田中一貞「図書館建築に就て」『慶應義塾学報』一〇四、一九〇六年。

- (18) 「三 初代監督田中一貞」慶應義塾大学三田情報センター編『慶應義塾図書館史』

慶應義塾大学三田情報センター、一九七二年および川合隆男「第四章 慶應義塾初代社会学教授 田中一貞」『近代日本社会学の展開―学問運動としての社会学の制度化』恒星社厚生閣、二〇〇三年を参照。また慶應義塾図書館に所蔵される『圖書館アルバム 慶應義塾創立五十年紀念』(一九一二年)、『慶應義塾圖書館アルバム』(一九一〜三四四年)でも当時の様子を克明に伝えている。

- (19) 『図書館雑誌』二八(一九一六年)掲載の「本会記事」には、大正五年日本図書館協会主催第十一回全国図書館大会が十月九〜十四日に山形・上ノ山・米沢・鶴岡・酒田の五泊六日で開催され、同会総裁の徳川頼倫や文部大臣高田早苗などの重鎮が参加していることが記録されている。譜代大名酒井家が治めた庄内地方に、一貞が会長としてこうした一行を率いてくる、という行事は故郷に錦を飾るものであったと推測される。

- (20) 東奥逸人「教授評判記」(『三田生活 私学の天下』研文社(一九一五)五〇〜五一頁を参照。国立国会図書館デジタルコレクションにて二〇二〇年十月十三日閲覧。https://dl.ndl.go.jp/info:ndj/pid/954793)に次のような記載がある。

田中一貞氏は再度の洋行に一段の人格を増した。氏が専攻の社会学は随意科丈に、學生に取つては屁の河童、塾生は仏蘭西語を氏に依つて学んでは居るもの、学問上氏に私淑する者は極めて稀だ。只夫れ仏蘭西仕込みの洗練された人格には、年一年と渴仰者を生じて来たのは事実である。日本に之れ程の風貌を備へた人ありとは全く不可思議である。況んや東北の山形から氏の如き好男子の輩出したのは、全く異数とす可きである。初め巴里から帰る早々、例の鼻眼鏡にアケビ蔓のバスケットを携帯に及んで、ステッキ小脇に抱へ込み乍ら、足早やに登校するのを見て、塾生は氏の好男子な丈に、氣隙だくと下馬評を浴せ掛けたものである。けれども之れは、彼の外観丈を見て全豹(貌)を押しさんとした誤謬であつて、氏は淡き事水の如く、磊落にして瀟洒たる絶好の紳士なのである。塾長鎌田栄吉氏が氏を信頼し、氏を無二の相談相手とする一事に徴するも、田中氏の人格が窺はれるでは無いか。

- (21) 堀梅夫「私の見た田中先生」『三田評論』二九二(大正十年十一月号)によると、本人の手帳に「大正十年三月より殆ど全く睡眠薬の為に眠る。精神の疲労思ふべし。妻の看護と誠意の為に生き延びたり。看護に就ては一点の不平なし。只感涙あるのみ。家庭に於て余は幸福なり。」と記してあつたという。また大正九年四月に鶴岡にいる一貞の母が体調を崩し、翌年の三月に九十一歳で亡くなるまで、一貞は四回鶴岡に帰省しているという。一寧・一貞の母が亡くなっていることは一松の「燈心草舎歌抄一」にも(大正十年)三月一日祖母永眠、故郷に発つ」と記されている。

一貞の不眠の原因に母の死が関与している可能性が考えられる。一貞の死は、「田中一貞君を偲ぶ（占部教授談）」『三田新聞』八三（大正十年十月十八日）にも報じられている。

(22) 鶴岡市郷土資料館今野章氏のご教示による。

(23) 『東京帝国大学卒業生氏名録』東京帝国大学、一九三九年。「大正三年七月卒業（前年九月ヨリ此年三月迄ノ間ニ於テ卒業シタル者）」の一〇六名のなかに、「田中一郎山形」と記載されている。国立国会図書館デジタルコレクションにて、二〇二〇年十月十三日閲覧。 <https://dl.ndl.go.jp/inforndj/pid/1457829/96>

(24) 「昭和十六年度広島市防空計画 別紙第三十号 防毒業務ニ従事スベキ医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、看護婦表」『広島原爆戦災誌 第五卷』二二三頁、広島市、一九七一年。註24、25、29、31にあげた広島市関係の資料の所在は広島市立中央図書館事業課館内サービズ係広島資料室のご教示による。

(25) 『広島県紳士録 昭和八年版』三四頁、西日本興信所、一九三三年。

(26) 「〇広島病院小児科部長任命 広島病院に於ては医学士内海静一氏死去せられて以来久敷小児科部長欠員なりしが今回東大出身医学士田中一郎氏を後任に任命したり」『芸備医事』二四九、一九一七年二月」と報じられた後、「●医学士田中一郎氏は、県立広島病院小児科部長として、多年敏腕を振はれしが、此程辞職の上広島市に於て小児科専門にて開業せらる」（同書三三三二頁、一九二四年五月）という記事の頃まで八年間、公職に就いていたことが判明する。『芸備医事』については広島県立文書館の西村晃氏のご教示による。

(27) この講演録が『廣島衛生医事月報』二二七（廣島衛生医事月報社、一九一七年）に掲載されているが、一郎の次の記事として黒川節司「電戦様性舞蹈病」が掲載されている。黒川節司（一八九〇～一九四五）は広島県病院の医師を務めた後、大正八年（一九一九）に広島市細工町（現・中区大手町）で開業した。短い期間ながら一郎と黒川節司は同僚であり、両者とも原爆で亡くなるまで広島市医師会の会員であった。黒川は美術家を支援し、鬘光や藤田嗣治と交流があったことが知られている。現時点で一松との接点は未確認であるが、後日の備忘のため、記しておく。藤崎綾「黒川節司の美術運動―昭和前期の広島における美術家支援と美術館構想」『広島県立美術館研究紀要』十五、二〇一二年などを参照。

(28) 前掲註10「燈心草舎歌抄三」（大正十三年七月～昭和四年）。なお、「燈心草舎歌抄二」（大正十一年四月～同十三年六月）には大正十二年三月に東京帝国大学を卒業し、四月から高輪中学に奉職、と記されており、「燈心草舎歌抄三」には大正十三年十二月に「高輪中学を辞す」と記され五首の和歌が認められている。「傍去ら

ずわれを囲みて別れ惜しむこの教へ子を見るがかなしさ」など、かりそめに一年半、中学教員として働いていたものの、生徒からも慕われ、一松も去りたいような愛着を持っていたようである。高輪中学での仕事は一時的なものであったためか、これまでに公表されている一松の職歴にはない経歴である。高輪中学（現・学校法人高輪学園 高輪中学高等学校）に確認したところ、確かに田中一松という人物が職員として在籍していた記録はあるが、在籍時期や職務内容については不明とのことである。そして一松はこの後、東京帝室博物館美術課に勤め、本格的に仕事を始めていくことになる。

(29) 一郎の講演は昭和三年九月二十九日に行われた。『JOFK 講演集第一輯』国立国会図書館デジタルコレクションにて、二〇二〇年十月十三日閲覧。

(30) 「第四節 原爆殉職者の援護と慰霊」『広島市医師会史 第三篇』三八〇～三八二頁、広島市医師会史編纂委員会、二〇〇〇年を参照。

(31) 「原爆殉職者名簿」『広島市医師会史 第二篇』二八七頁、広島市医師会史編纂委員会、一九八〇年。

(32) 前掲註10「燈心草舎歌抄二」によると、大正十二年八月に一松は広島に旅行し、四国に渡り、奈良で関東大震災の報に接し、急遽北陸経由で帰京している。東京に帰った後は、焼野、廃墟、罹災者、身内を亡くした人などの歌が綴られている。

(33) 前掲註10「燈心草舎歌抄」は私的なものゆえ出光美術館には譲渡されず、結果的に当研究所に所蔵される「田中一松資料」には入らなかったものである。私的なものを資料として取り上げる際は慎重に取り扱う必要があるが、所々にその時の年齢や学年、どこに住んでいたかなどの情報が、おそらく晩年の一松によって書き加えられている。私的なものながら自分の生きてきた軌跡が歴史的資料であることを、一松本人が認識し、後から見られることも意識していたものと考えられる。

(34) 前掲註21堀氏論考を参照。

(35) 土居次義「生活と美術」『郵政』二月号、郵政省、一九八三年（『花鳥山水の美―桃山江戸美術の系譜―』京都新聞社、一九九二年に採録）を参照。多田羅多起子氏のご教示による。

(36) 「日露戦争と諷刺画・漫画」『日清・日露戦争とメディア』展図録、川崎市市民ミュージアム、二〇一四年を参照。ここでは熊がロシア、豚が中国、鶏が朝鮮に喩えられている。挿図14は、本図録No.1〇八（同館蔵）から転載した。

(37) 一貞は上京した一郎を自宅に下宿させ面倒を見ていたが、一貞は幼い頃から一郎を気にかけていた様子がわかる。以下、やや長いが重要な情報を含むため、前掲註16『世界道中かばんの塵』（三三八～三四〇頁）を引用する。

「紐育より新橋まで・七 後ろから「田中君」」

(大正三年一月)二十七日午前十時にボストンを發して同日午後二時ニュー・ヘーヴンに着き、電車に乗らうと思つてチャペル街とチャーチ街との角に立つて居ると、後から突然に『田中君』と呼ぶ者があるから、振り返つて見ると、頭の稍や禿げた一米國人である。はてなと思つて熟々其容貌を見るとアーサー・チェンバースと云ふ男であつた。是は私が十三年前エール大學在學中、近所の繪草紙屋に小僧をして、毎日のやうに私の處へ遊びに来た非常に深切で可愛い子であつたが其当時チェムバースは十四歳で中學の一年生、自勞自活の健気な少年であつた。或日、私の甥に同姓の一郎と云ふのがあつて、チェムバースと同年であり且つ矢張中學の一年生であると云ふ事を談すと、其は面白いと云つて早速日本に居る一郎の處へ手紙を出し、爾來二人は數、手紙の往復をして居た。私がエールを去る時は非常に別れを惜み、佛國に行つてからも屢、音信があつたけれど段々何時とは無しに手紙の往復は止み、近年全くチェムバースの消息を聞かなかつたので、今突然に再會しようとは思はなかつた。チェムバースは、其後エール大學を卒業して今は辯護士を業として居ることを語り、偕一郎は何うして居るかと思ねた。一郎は東京帝國大學の醫科を卒業して今は大學病院に勤めて居ると答へると、自分は辯護士、一郎はドクトル、其は面白いと云つて非常に喜び、早速一郎に手紙を出さうと云つて居た。(後略)

このように、一貞が甥の一郎に対して国際交流を促し一郎もまたそれに応えていたことがわかる。鶴岡の中学生の一郎とチェンバースとの文通は、当然英語で行われたであろうし、こうして視野を拓けることが一郎にとって、その後医師として活躍していくための素地となつたことであろう。一貞は大学生の二十三歳の時、病気で鶴岡に帰っていたが、一郎はその時小学生で八歳、両者の間には深い親交があつたものと想像される。

- (38) 『福翁訓話』実業之世界社、一九〇九年。
- (39) 小川寿一『日本繪葉書小史(明治編)』表現社、一九九〇年を参照。
- (40) 向後恵里子「通信省発行日露戦役紀念繪葉書―その実相と意義」『美術史研究』四一、二〇〇三年を参照。
- (41) 大下藤次郎「肉筆繪葉書」『繪葉書趣味』日本葉書會、一九〇六年を参照。前掲註16に同じ。
- (42) 森清涼子編「大下藤次郎年譜」『みづゑ』九〇〇(特集・水彩画家・大下藤次郎)、一九八〇年を参照。
- (44) 前掲註16、一四二頁を参照。

- (45) 前掲註16、一〇三―一〇四頁「ドレスデンの名畫」を参照。
- (46) 前掲註16、一三一―一三三頁を参照。
- (47) 拙稿「昭和の古畫備考」―田中一松資料について『原本「古畫備考」のネットワーク』思文閣出版、二〇一三年を参照。
- (48) 『田中一松先生の日本の文化財保存と太平洋戦争』庄内文化財保存會、一九八五年を参照。

〔付記〕

本研究はJSPS科研費一九H〇一二二七の助成を受けたものです。

(えむら ともこ・文化財アーカイブズ研究室長)

図版要項

- 一(a) 田中一松 海住山寺奥之院十一面觀音立像調書(古美術巡礼IIより) (カラー)
- インク、紙 縦二〇・一cm 横(見開き)二六・六cm 東京文化財研究所蔵
- (b) 田中一松 鳥獸戲画断簡(原品東京国立博物館)調書(卷十二より) (カラー)
- 鉛筆、紙 縦二〇・八cm 横(見開き)三三・四cm 東京文化財研究所蔵
- 二(a) 田中一松 狩野養信模 中殿御会図(原品東京国立博物館)調書 (カラー)
- (卷十五より)
- インク、紙 縦二〇・八cm 横(見開き)三三・四cm 東京文化財研究所蔵
- (b) 田中一松 狩野養信模 中殿御会図(原品東京国立博物館)(カラー)
- 紙本墨画淡彩 縦二七・九cm 横三九・九cm 東京文化財研究所蔵
- いずれも著者画像提供
- 江村知子「田中一松の眼と手」参照